
君と僕

春乃苑香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕

【Nコード】

N9758F

【作者名】

春乃苑香

【あらすじ】

ちよつと変人の森君が、ある日、山田の家に転がり込んできて……。君と僕のどうしてもすれ違う心を散文詩のように綴りました。難解長文10題。お題小説です。アズマさんのサイト7-1 (http://www15.ocn.ne.jp/~mukukan/7-1/) よりお借りしました。ぬるいですが、BLです。ご注意ください。より分かりやすくするため、1/22に前書きを加筆しました。

この世の不条理こそ飽食を覆し安定の不在を証明する最高のスパイス（前書き）

二人とも僕視点で分かりにくいかもしれませんが、一話ごとに視点を設定しているので、各話の途中では入れ替わりません。

第一話は山田サイドです。

この世の不条理こそ飽食を覆し安定の不在を証明する最高のスパイス

森君はときどき不思議なことを言う。

「この世の不条理こそ飽食を覆し安定の不在を証明する最高のスパイスだったんだ。」

僕には森君の言ってる言葉が一つも分らない。

「森君、どうしたの？」

「仕事もなくなつて、女にも逃げられた。おかげで、僕は今日のご飯にも困る有様だ。」

それは大変だ。僕は事情を聞くことにする。

森君は言う。

「上司に『お前、馬鹿じゃないの?』と言ったら、いきなり首になつたんだ。」

同棲してた女にその話をしたら「あんたこそ馬鹿じゃないの?!」と怒鳴られ、

『わめくな、ヒステリック女。』と言ったら、女も荷物まとめて出て行った。」

「僕は正直なだけなのに、不条理だと思わないか。」

「家事は女が全てやっていたから、僕は何も出来ないんだ。」

当然、家はごみの山になってきてね。大家に家も追い出されたん

だ。」

えっ。家、追い出されちゃったの。

「家賃も滞納してたしな。」

それ、いつの話？

「家を追い出されたのは、今さっき。会社をくびになったのは、半年くらい前の話だよ。」

しばらく連絡とってなかったけど、森君、大変なことになってたんだな。

「そこで、気づいたんだ。この世の不条理が飽食に倦んだ世界を覆し、安定の不在を証明する最高のスパイスだと。」

僕は口には出さなかったけど、思ったんだ。

ねえ、森君。それって、全部、君が悪いんじゃない？

夢の果てを越えた現の夢の果てにある境目のない現をこそ夢見る（前書き）

第二話は森サイドです。

夢の果てを越えた現の夢の果てにある境目のない現をこそ夢見る

実験室ってすごくいい。

真っ白な白衣もいいし、金属とかガラスとか無機質な感じも、とてもいい。

僕は実験室にいたかった。

だから院まで行ったし、がんばって就活もしたつもり。

でも、4月になって僕がいるのはオフィスだった。

実験室じゃなきゃ、どこも意味ないのに。

現実世界で、僕はもう十分にひどい目にあってる。

それなのに、夢でも僕は怖い思いをする。

あの上司がべたべた僕の身体に触ってくるんだ。

にたにた笑う脂っぽい顔も、すぐにうわずる怒鳴り声も、あの上司の全てが嫌いだった。

夢だと分かっているけど、気持ち悪い。

あんまり気持ち悪いから、言っちゃった。

「いい加減にしろっ！この馬鹿！」

みごと上司を撃退！ざまあみろ。
僕も結構、やるんだぞ。

すると、場面が変わって、山田が自分の家の玄関で笑ってる。

これはまだ大学生の頃の話だ。

サークルの奴らがつれだって、合宿という名目で山田ん家にどやどや押しかけた。

僕も後ろから付いていく。

だって、山田の家に興味があつたから。

僕を見つけた山田はちょっと意外そうな顔をするけど、すぐに笑って迎えてくれる。

「あ、森君。来たんだ。入れよ。」

楽しかった。

夢の果てで、僕は幸せだった。

実験室はすごくいい。だけど、君の家もすごくいいと思った。

朝。目覚ましがジリジリいうと、山田が手をのばして、それを止める。それから山田は五分ほど、必ず二度寝する。その五分間、うつろな意識の中で、僕は山田の体温を隣に感じながら、さっきの夢のつづきを見る。夢か現か、そこには境目がない。そして、そんな現実こそ、僕が欲しいと夢見るものなんだ。

君には黙っていよう。

君のところへ行きたくて、家賃を滞納してたこと。

まさか、本当に追い出されるなんて思いはしなかったけれど。

絶対なる神に無償の慈愛を求めると言う驕った過ちをも称う（前書き）

第三話は森サイドです。

絶対なる神に無償の慈愛を求めると言う驕った過ちをも称う

「どこへ行ってたの？」君が尋ねる。「教会。」僕が答える。

「へえ。そんなものが近くにあったんだね。」「大学の近くだよ。知らなかった？」

「何かをお願いしてきたの？」「うん。」

「えっ、ほんとに?! どんなこと?」

「もう苦勞しないでいいように、無償の慈愛をお与えください、って祈ってきたよ。」

君が、という主語を抜いたのは僕のエゴ。

絶対なる唯一の神?

無償の慈愛?

そんなもの、元々どちらも信じていない。

ただ、君のいない君の家にはじっとしていられなくて。だからといって、何をする気にもなれなくて。

勝手知ったる大学周辺だからと、散歩を始めたら、知らない路地にたくさん突き当たった。

教会なんてのがあった。

目に入ったら、扉を押してみたくなった。

扉が開いてたから、入ってみた。

入ると、話しかけてくる人がいた。

その人は色んなことを僕に言った。

その人は話が上手くて、僕はちよつとその気になってしまった。

他人のために祈ろうなんて、ちよつとした気まぐれだった。

僕のもつ感情はただの驕りで、すぐ他者に縋るのはただの過ちだ。それなのに「それ、いいねっ。僕も今度、お願いしてこようかな」なんて、君は明るく笑って言えるんだね。

こんな僕なのに。本当に、君は僕の全てを、認めてくれる。君は気づいてないかもしれないけれど、教会になんて行かなくなつて、君という神に僕は救われてるんだよ。

君が苦勞しないように、やっぱり明日もお祈りにいこうか？

うん。

苦勞させてるのは、僕だ。

骨まで溶けるほどとろとろと煮込んだスープの中でまどろみ揺蕩う午後（前書き）

第四話は山田サイドです。

骨まで溶けるほどとろとろと煮込んだスープの中でまどろみ揺蕩う午後

僕は森君のことが好きだった。

森君はいつも人が考えないようなことを言う。

最初はそれが楽しかっただけのようない気もする。

でも、いつの間にか、森君は僕の特別になっていた。

いつからなのか、分からない。

大学で一緒のサークルに入った時から、だったのかもしれない。

僕らのサークルは女子が多くて、10人に満たない男子とは全員、それなりに仲が良かったけど、森君だけは特別だった。

特別といえば、出会いからして特別だった。

「どうして、ここに入ったの？」

そう聞くと、森君は真面目な顔して「不思議な声がしたから。」

この人絶対まともじゃない、と僕はかなり焦った。でも、僕の動揺を無視して、森君は「ほら。人の声みたいじゃない？」と話し続ける。

それはマンドリンのトレモロの音だった。

単に、経験者で美人な先輩がいるという理由で、このマンドリン・サークルを選んだ僕は、森君が心からマンドリンの音に惚れて入部したんだと知って、なんだか感動した。

「マンドリンって、いい音だね。」

「うん。弦と弦を弾く間に生ずる空気の音がいいね。同一音の反復によって、積み重なっていく切れ切れの空気が見えそうだ。」

ちょっと俯いて言う森君は頭のおかしい人ではなく、極度の照れ屋なのだと知った。

知ったから、どうということもなく、森君の言うことはいつも、よく分からなかった。

人付き合いも悪い。

平気で問いに問いで返して、答えない。

ときどき、そんな森君の対応にいらいらした。

でも、僕はいつしか森君が本当は優しいことを知ってしまった。そう。

両親が亡くなった時のことだ。

森君は僕に手紙をくれた。

君のお母さんが作ったご飯は温かかった。

温かいものの上昇運動を抑えるのは難しい。

だとすれば、君も上昇するのだろうか。

僕は思う、宇宙は冷たいけれど星は温かい。

温かいものは心地いい。

君のお父さんを知らないことは残念だけど、また知る時もあるかもしれない。

お姉さんによろしく。

手紙が家に届いたのは、両親が死んでだいぶ経った頃のことだった。僕は森君が両親の葬式に来たかどうかとも知らない。

サークルの代表が何人か来たらしいけど。

事務的なことは全部、姉夫婦がやっていた。

僕はただ悲しくて、下を向いて泣いていた。

立ち直ってしばらくしてからもらった手紙の内容は分かるようで、やっぱり分からなかった。それでも、森君の気遣いが感じられて、僕は泣きそうになった。

そのとき、僕は森君が好きだとはっきり気づいた。

もちろん、黙っていたけど。

森君がゼミでは優秀で、凡人の僕とは全然違う天才だと知っていたから。

それに森君、モテたしね。

だから、ときどき会うだけで満足だった。

僕が近づけるのはここまでだと、ちゃんと心得ていた。

最近、森君の様子がおかしい。
素直に優しいんだ。

僕に分かる言葉でしゃべってくれる。
ご飯の後片付けと一緒にしてくれる。
洗濯物が畳んであったり、仕事から帰ってくるとお風呂が沸いていたりする。

だから、勘違いしそうになる。
森君も僕のこと……って。

そんなこと、思っちゃいけないのに。

森君にとって、ここは雨風を凌ぐテントとそう変わらないのに。

この間の休日。
僕らはいつものように、二人でごろごろしながら、過ごしてたんだけど。

僕はついに言っちゃった。

「君にそんなに優しくされると、僕、骨の髄までとろとろになっちゃうよ。」

森君は天井を見ながら答えた。
「そしたらさ、食べてあげるよ、僕が。とろとろになった君をスー

プにして。この間、本で読んだんだ。その本ではね、ラスト、好きな人を食べてしまうんだ。これこそ、純愛だ。」

やっぱり、森君は森君だった。

僕はちよつとホツとした。

相互的意識下で刹那ずつ歪み出した致命的欠陥クインテット（前書き）

第五話は山田サイドです。

相互的意識下で刹那ずつ歪み出した致命的欠陥クインテット

昨日、サークルの同級生と飲みに行った。

森君は来なかった。

そこで、森君の噂を聞いた。

会社でひどい虐めを受けてたって。

今、僕の家にいるなんて言えなくて、僕は黙って聞いていた。

会社で虐めなんておかしいけれど、森君なら有り得るかもしれない。

僕が言うのもなんだけど、森君って変わってるから。

そう言われれば、森君は僕の家に来たときから、ちょっとおかしかった。

最初の何日かは客間で寝てたのに、いつの間にか、僕のベッドに潜りこんでくるようになった。

僕は追い出そうと何度か試みたけれど、追い出しても、追い出しても、森君は来るんだ。

それで一緒に寝るようになったのだけど、森君は毎晩、うなされるんだ。

起こそうとしても起きなくて、その内静かになる。

毎晩うなされてるくらいだから、きっと森君自身も思うところがあるだろうに、何も言わないから、僕も何も聞けない。それに、森君は後ろから、肩をたたくと、すごく怒る。最初に怒られたとき、そんなこと気にする奴だったかなあ？と不思議に思っただけだった。

けど。森君は必ず、僕の背後にまわってくことに気づいた。要するに、僕に背後をとられたくないんだ。

会社から帰ってきた僕はその日疲れていて、ちょっぴりいらいらしていた。だから、台所で食事の準備をしながら、僕の背後をこそこそと動き回るのがうっとうしくて、僕は森君を怒鳴りつけてしまった。「邪魔だからっ！どっか行っとけよっ！飯なら、出来たら持つて行ってやる！」

森君は黙って、家を出て行った。ボタンと音がしたその後。テーブルにきれいに皿が並べられていた。

森君、ごめん。

僕らの周りには雑音が多すぎる。

耳障りな音たちは重なり、共鳴しあって
クインテット
五重奏みたいに、あとから後から追いかけてくる。

どんなに美しい音楽も要らない。
二人だけの世界だったらしいのに。

森君、ごめん。

森君は優しいのに、僕は森君の優しさの理由を疑ってるんだ。

烏鷺の惑い紛れる雨露の濡れ夜に辿る迷いの迂路の行き着く先（前書き）

第六話は森サイドです。

烏鷺の惑い紛れる雨露の濡れ夜に辿る迷いの迂路の行き着く先

ジャケットだけ羽織って、家を出た。

外は、雨が降っていた。

傘を持って出なかった僕は、だんだん濡れてきた。

僕が悪いんだから、仕方ない。

閉店間近のデパート。

雨をしのぐためだけに入ったはずなのに、
気がつけば、僕は買い物してた。

君が好きな南蛮漬とか。

君が好きなブリー・チーズとか。

ついでに僕の好きなデンマーク・チーズも買おう。

それから それから

半額のトランクスを見つけた。

あ、これ。君がいつも着けてるブランドだ！

有名ブランドだからね。僕でも知ってるよ。

自分に買ってみよう……これ、元値は結構、高いんだね。

それから それから

ああ、雑誌も買おう。

今月号はたしか天体特集だ。

天体の話、好きなんだよね。

それから それから

それから それから

僕はおもちやコーナーまで来ていた。

今、僕の目の前に並んでるのは

クラシカルなゲームたちだ。

トランプやウノといった様々なカードゲームと

ボードゲームを小型化したやつ。

旅行とかに持っていく、あれだ。

僕はあまり、いや、全然遊んだことはないけれど。

最近はこんなに小さくて、安くて、色んながあるんだな
僕は感心して眺めていた。

そして、それは僕の目にとまった。

囲碁——”烏鷺^{うろ}の争い”ともいったつけ。

烏と鷺

カラスとサギ

黒と白

とっさに、僕は

相容れぬ君と僕のことを思った。

君はいつも明るくて、社交的で。
僕にはないものを全て持ってる奴だった。

大学するとき、そんな君を僕は羨ましいと思ったことはただの一度もなかった。
僕も君にはないものをたくさん持ってる自信があった。

でも、今。

僕は何を言えればいいだろう。

分かってたけど。
知ってたけれど。
持ち物の価値は同じじゃない。
多く持っていればいいものじゃない。

君がもってるものが、社会では評価され
僕の持ち物は評価されなかった。
それは君のせいではないけれど。
口惜しくって、君を恨まずにはいられない。

大学の頃。

何に対しても執着のない君は、白かった。
何の裏もない君の表情や発言に、僕は薄っぺらな白を見ていた。

腹に一物ある僕の方が
よっぽど人間らしい、と心のどこかで思っていた。

深みのある黒は、薄っぺらな白を凌駕するはずだった

はずだったのに……

かつて薄っぺらな白だったものは

社会という空を美しく飛翔する一羽のサギに化身し

深みのある黒だったはずの僕は

社会という空に嫌われ、飛ぶこともままならない。

そして、今。

僕は何を言えればいいんだろう。

僕は囲碁セットをもってレジへ行った。

君と囲碁をするところを想像すると、ちょっと笑えたから。

僕は追い出されたところなのに、

もう、君のところへ帰れると思ってる。

君と普通に会話して、君と普通に家で過ごすことを考えてる。

僕は皆が言うように、どこか、可笑しいんだろうか。

デパートに蛍の光が流れ始め

僕はデパートを後にして、雨の中へ。

なぜ、傘を買わなかったのだろう。

ああ、そうだ。

僕は馬鹿なのだった。

コンビニで傘を買う。

ジャケットに財布が入ってて、本当ヨカッタ。

雨の中を歩いてると、弱虫で何も出来ない自分を
いよいよ、はつきりと感じる。

いっそのこと、

君も、この雨で、汚く黒くなってしまえばいいのに。

僕は真夜中になっても帰れず、駅や大学の辺りをグルグル歩いた。

君の家は迂回したはずだった。

なのに、行き着く先はやっぱり、君の家で。

僕はそっと、ドアを押してみた。

鍵はかかってなかった。

「おかえり。」

君は寝ないで待っていた。

そして、君は

雨に濡れてる僕も、

冷たくなってる僕の夕飯のことにも触れず、
ただ、僕の手を持ってるものを指差した。

「何、買ってきたの？」

僕の買い物袋を覗き込む。

あーとか、わーとか言っていた君の声が、最後の紙袋でとまる。

何だろう？って顔してる君。

「どちらが勝つか烏鷺うろの争い。」

包みを開いて見せると、

「えーっ、僕、囲碁なんて出来ないよ」

不思議そうな顔をしてる君がいた。

耳を塞ぎ口を閉ざすと言う積極的挙動を不作為と論じた場合の作為（前書き）

第七話は、山田サイドです。

耳を塞ぎ口を閉ざすと言う積極的挙動を不作為と論じた場合の作為

発端は、サークルの同級生に会ったことだった。

「おつ、山田じゃねえか」

「森も一緒か。お前ら、相変わらず、仲いいのかよ」

「なあ、森。この間の飲みで、お前のこと話してたんだぜ」

「社内で村八分にあってたって、本当か。」

「んで、飲みに誘われただけで上司を馬鹿呼ばわりしたとか。」

僕は森君の腕をしっかりと掴んだまま、言った。

「本人にする話じゃないだろ。今、急いでるから！またな！」

家へ帰ると、森君が言う。

「知ってたんだ。」

森君は僕を睨みつけて、さらに言う。

「その行為に意図はなかったのだろうけど、君はいつでも受身で知らん振りだ」

だって、君が。

君が望んだんじゃないか。

だから耳を塞いだ。

だから口を閉ざした。

積極的に。

それなのに君は責めるんだね。僕は受身だと。

「知ってたんだっ！」

君は僕に優しく接して

その裏では、僕に同情して

自分だけ善人になってたんだっ！

君は知ってて、僕を……」

森君が頭を抱えて怒鳴ってる。

僕はなすすべもなく、ただ森君を見つめていた。

ねえ、森君。

君が一番よくわかってるんじゃない？

僕が知らない振りをしてあげてた理由。

君が知られたくないって顔してたから。

それなのに

今になって君は僕に踏み込んで来いって言うんだね。

もし、僕が勝手に踏み込んだら、もう傍にはいさせてくれない
くせに。

ひどいよ。君は。

この世のリアルを映し出し色を成して照らし出されたネガの世界（前書き）

第八話は森サイドですが、途中から会話のみとなっています。

この世のリアルを映し出し色を成して照らし出されたネガの世界

ネガに写った像だけがリアルだった。

楽しいという色で彩色された記憶を僕はじっと眺めていた。

山田が僕の手の中を覗き込む。

「サークルで合宿行ったときの写真だ。」

「楽しかったから、持ってる。」

「僕もいっぱい持ってるよ。PCに沢山入ってる。見る？」

「うん。」

パチッ。カタカタ。

「ああ、これだ。」

「山田、変な顔。」

「わざとだよ。その方が後で見たとき、面白いだろ？」

「うん。変な顔。」

「森君もあんまり写ってないね。」

「うん。写真は嫌い。魂をとられる。」

「何を、江戸時代みたいなこと言ってるの。」

「ねえ、合宿の写真も面白いけど、僕のお気に入りに、見せてあげるよ。」

カタカタ。カタカタ。

「これ。卒業式のとくに撮ったやつ。」

「覚えてない。」

「えーっ。人に頼むの、大変だったんだから。」

「僕、横向いてる。」

「僕はちゃんと言ったよ。一緒に写真、撮ろうって。」

「知らない。」

「もうちょっと、こっち向いてくれたら、最高だったのに。でも、これ唯一のツーショットだよ。」

「……」

「いいでしょ？」

「……」

「森君、聞いてる？」

「プリントして。」

「えっ、これ？」

「うん。それ。」

「じゃあ、ちゃんと現像に出す。」

「……」

「大丈夫。ネットで注文しとくから。後で自分でコンビニに取りに行つてよ。」

「じゃあ、それお願いする。でも、今ほしいから、やっぱりプリントして。」

「普通紙しかないけど。」

「いい。それで。」

カチャカチャ。ポチ。

ジーッ。カタカタカタ。ジーッ。

プリンターから紙が吐き出される。A4の紙の四分の一ほどが色に染まっている。二人の大学生が黒いリクルートスーツを着て、卒業証書の筒を片手に立っている。一人は少し横を向いて無表情に。一人は正面に向かって、満面の笑みで。

「ねえ、森君。まだ、怒ってる？」

「……」

「ごめん。僕、うすうす気づいてた。森君がここに来たときから。でも、森君、行っちゃうでしょ。問題が解決したら。僕のことなんて、見てくれないと思ったから。僕、森君にいてほしかったんだ。」
「……」

「姉夫婦が渡米してから、寂しかったし。僕、森君にすごく感謝してる。だから、許してほしい。」

「怒ってない。君は悪いことなんてしてない。僕が勝手に来て、勝手に君の生活を掻き乱してるんだ。なのに、この間は怒鳴って、僕こそごめん。」

「僕、まだ、ここにいてもいい？」

「もちろん。好きなだけいたらいいよ。食費いれてくれるから助かるよ。それに、森君、家事うまくなってきた。あ、前から気になってたんだけど、働いてないのに、お金どうしてるの？」

「今までの貯金。小学生の頃からお年玉とか、全部貯めてた。」

「森君、意外と堅実だったんだね。」

「……」

「ねえ、森君。これから写真撮らない？」

「なんで。」

「仲直り記念。セルフタイマーでツーショット。どう？」

「山田がそうしたいなら。」

「僕がしたいなら？」

「付き合ってやる。」

「やったあ。どこがいいかな……家の中はあんまり綺麗じゃないし……そうだ！庭にしよう！僕、カメラ探してくるね。」

冬枯れ時失せた霞みの庭に揺れる一輪の哀れなそうび（|| 薔薇）の棘に見惚る

第九話は、森サイドです。

冬枯れ時失せた霞みの庭に揺れる一輪の哀れなそうび（＝薔薇）の棘に見惚る

秋が終わり、冬のやってきた庭は寂しい。

でも、人間は一日に数分でも外の空気を吸わないと

酸化がすすんで寿命が縮んでしまうから、ヒトにとって庭は必要なのだろう。

枯れた庭を見回すと、なぜか一輪だけ、薔薇が弱弱しく咲いていた。

じっと見つめていると、カメラを持ってきた山田の声が背後からする。

「君みたいだ。」

これが僕だって？僕は振り返って山田を睨む。

山田が笑う。

「棘で身を守りながらも、綺麗に咲くことは諦めない。僕なら、棘で身を守るなんて面倒だから、最初からこんな目立つ花は咲かせないもの。森君は誇り高き一輪の薔薇だよ。」

山田は優しい。

優しい山田がどんなに褒めようと

たった一輪で咲いているその薔薇が僕には哀れに思えた。

でも、君が褒めてくれるなら。

君が応援してくれるなら、僕は誇り高く咲いてみようかな。

それがどんなに寂しいことでも。どんなに哀れであっても。

少しだけ、そう思えた。

「背景、ちょっと寂しいかな。あ、でも、こうすると、うん。森君、ちょっと右によって。そうそう。薔薇がちょうど入るようにしたいんだ。」

そして、出来上がった写真は山田と僕と薔薇のスリーショットだった。

デジカメの小さい画面の中。

やっぱり哀れな薔薇を見て、僕は思った。

さっきのあれは、やっぱり訂正しよう。

僕は“山田の庭に咲く”一輪の薔薇でありたい。

たとえば、それが冬枯れの庭であっても。

山田に見惚れてもらいたい。

山田の隣でなきゃ、僕には意味も価値もない。

冬枯れ時失せた霞みの庭に揺れる一輪の哀れなそうび（|| 薔薇）の棘に見惚る

外の空気を吸わないと身体が酸化する云々は、森君の思い込みで、
なんら科学的根拠に基づいてはおりませんので、悪しからず。

平穏安寧静泰な日々の上で刻一刻と肥大化した脳内爆弾のリミットへの祝福（前

第十話は山田サイドです。

平穩安寧靜泰な日々の上で刻一刻と肥大化した脳内爆弾のリミットへの祝福

僕はその写真を見ると、自然と顔が綻んでくる。森君が嫌がるから、僕は写真立てを自分の部屋に置いた。冷蔵庫に貼ろうかとも思ったけど、これも森君が嫌がりそうだからやめた。

あれから、毎日が幸せだ。だからといって、僕らの状況が変わった訳ではない。

森君は、僕の家に移り込んできたただの居候で、大学時代からの友人。

最近は森君もずいぶん、落ち着いてきた。

昨日なんて、気づけば、僕、森君の後ろから肩たたいてたし。

とりあえず、背面恐怖症はなくなったんだ。よかったね。森君。

それに、最近。森君は頻繁に出かけてるみたい。

結構、忙しそうだ。

きっと、森君は新しい生き方の模索を始めたんだ。

僕にはわかる。

森君が僕ん家という救難テントを出て行く日も近いことが。

森君はここで終わる人じゃない。

きっと、ここから飛び立っていく日がくるだろう。

そして、一度飛び立てば、彼は二度とここへは戻ってこないだろう。

リミットは確実に近づいてる。いつか、終わりがくるだろう。でも、それまでは、ここにしよう。

ここが森君と僕の家だから。

「いってきます。」

「いってらっしゃい。」

僕らは家族でもないし、恋人でもない。

それでも一緒に暮らした。

一緒にご飯を食べた。主に、僕が作って。君は食べる人で。

初めて、用意を手伝ってくれたとき、僕、本気で感動した。

その後、同居人なら、当たり前のことだって気づいたけれど。

部屋はいっぱいあるのに、一つのベッドで寝た。

そのことで、最初、言い争ったよね、窮屈だって。

あの時は安らかな睡眠を妨害する森君を本気で怒ったけれど、今なら笑える。

ほかに、他愛もないことで喧嘩したね。

雨の中出て行った森君を一晩中、待ったこともあった。

その後食べた南蛮漬けは、なんだか味がよく分からなかったよ。

そして、この写真。

僕にとって、最高のプレゼント。

僕らがここで暮らした、確かな温もりを写真が教えてくれる。

大丈夫。

この写真があれば、君が離れていくのも怖くない。

そして、その日がくれば、僕は笑顔で祝福しよう。

森君の脳に、僕の笑顔が刻みこまれるように。

＜おわり＞

平穏安寧静泰な日々の上で刻一刻と肥大化した脳内爆弾のリミットへの祝福（後

最後までお付き合いくださり、ありがとうございました。一言感想
やご指摘など頂けると、非常に嬉しいです。

2/3 続編の連載をこちらで始めました←←
<http://harunosonoka.blog.fc2.com/blog-entry-13.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9758f/>

君と僕

2010年10月17日02時28分発行